CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

同時通訳はなぜ可能なのか ～同時通訳の認知・言語学的メカニズム～

著者	染谷 泰正
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	6
ページ	83-118
発行年	2012-03
その他のタイトル	Why Is Simultaneous Interpreting Possible? : Cognitive-Linguistic Mechanisms of Simultaneous Interpreting
URL	http://hdl.handle.net/10112/9590

吹田市民大学講座　関西大学講座 講演録
（第１部）

2011 年 9 月 29 日から 10 月 20 日にかけて、関西大学千里山キャンパスにおいて平成 23 年度吹田市民大学講座・関西大学講座が開催され、外国語学部所属の 4 名の教員（染谷泰正、菊地歌子、石原敏子、李春喜）が、順番に講演を行いました。

本年度の市民大学講座は、「通訳・翻訳の世界」というテーマのもと、通訳翻訳を専門とする前記 4 名の教員が通訳翻訳の面白さと難しさ、およびその世界の拡がりを、具体的な事例を豊富に盛り込みながら、理論と実践・実務の両面から、一般の方向けにわかりやすく解説したものです。以下に掲載する原稿は、本講座での講演内容を書き起こした上で、それぞれの先生方に適宜、修正・加筆を加えていただいたものですが、紙幅の都合上、今回は 4 回の講演のうち第 1 回と第 3 回分を掲載します。

なお、講演の書き起こしや原稿整理等について外国語学部学生の橋本弥奈さんと横田マリーさんにご協力をいただきました。吹田市教育委員会の広瀬幸恵さん、および関西大学社会連携部の木下悠介さんには、講演会の準備や打ち合わせ等でいろいろとお世話になりました。この場を借りて改めてお礼の言葉を申し述べます。

（文責：染谷）

講 演 録

吹田市民大学講座　関西大学講座　講演録（第１回講演）

同時通訳はなぜ可能なのか

～同時通訳の認知・言語学的メカニズム～

Why Is Simultaneous Interpreting Possible?
— Cognitive-Linguistic Mechanisms of Simultaneous Interpreting

染　谷　泰　正
Yasumasa Someya

本日はお忙しい中、たくさんの皆様においでいただき、ありがとうございました。ただいまご案内がありましたとおり、今年の吹田市民大学関西大学講座は、「通訳翻訳の世界」と題しまして、通訳翻訳を専門とする関西大学外国語学部所属の４名の専任教員が順番にお話をさせていただくということになっております。本日はその第１回目ということで、通訳をテーマに、とくに同時通訳というのはどういうメカニズムで可能になるのかということで、主として認知的および言語学的な観点からお話しさせていただこうと思います。本日の講義のアウトラインはお手元のハンドアウトにあるとおりですが、時間があれば通訳訓練法を応用した効果的な英語学習法についても触れたいと考えています。

１．はじめに

通訳というのは、異言語・異文化の接触にともなう現象ということになりますが、そういう意味では人類の歴史と共にあるといっていいだろうと思います。ものの本によりますと、人類最古の職業は売春だそうですが、通訳もそれと同じくらい古い── これはロシア語の通訳者であった故・米原真理さんの著書に、まあ彼女一流のジョークとしてですが、そういうことが書いてあります。人間がコトバを獲得するようになりますと、それぞれの地域地域で別々の言語が発達していきます。そういうそれぞれ異なった言語をもつ人たちが接触する場面が多くなってきますと、自然発生的に異言語間のコミュニケーションの仲介をする人たち、つまり今でいう通訳者の役割を担う人たちが出てくるわけですが、通訳者というのは、昔からしばしば異民族に対する政治的あるいは宗教的な支配の道具としても使われてきたという事実があります。

そういう意味では、まあ、あまり評判のいい職業だったとはいえないところがあります。

「マリンチェの悲劇」── 裏切り者としての通訳者

ひとつ例を挙げますと、これは皆さんどこかで聞いたことのある話かと思いますが、アステカ帝国の「マリンチェの悲劇」という話があります。マリンチェというのは、アステカ帝国（1325 ～ 1521年）の貴族の娘として生まれた女性で、その後、継母に邪魔者扱いされて奴隷として売られることになり、やがて当時のスペインから来た征服者、エルナン・コステロに女奴隷として献上されます。要するに性的な奴隷ですね。マリンチェはおそらく美しい女性だったのだろうと思いますが、非常に聡明な女性でもあったようで、コステロがアステカ帝国を征服するに当たって、その水先案内人兼通訳者として多大な貢献をしたとされています。ただし、征服者側から見ればマリンチェは功労者ということになるわけですが、アステカ人にとっては彼女は民族の裏切り者ですね。そういうわけで、いまでもメキシコあたりではマリンチェは裏切り者の代名詞となっているそうです。この「マリンチェの悲劇」というのは、そういう有名な話なのですが、マリンチェに限らず、当時は征服者が現地の住民を拉致して本国に連れ帰り、そこで言葉を教えて再び現地に送り込むといったことがしばしばあったようです。もちろん、ただ帰すわけではなくて、征服や支配の手先、あるいは道具として送り込むわけです。

こういう話、どこかで耳にした記憶ありますよね。北朝鮮では最近までこういうことをやってました。人を強制的に拉致してスパイとして養成する。日本でも、その昔、神隠しというがあって、昔話なんかでよく出てくる話ですが、ある人が突然、これといった理由もなくいなくなる。こういうのもあるいは、いわゆる拉致だったのかもしれません。

こういう例は、いわば異言語・異文化接触にともなう悲劇的な例のひとつですが、一方で、もっといい意味で異文化交流の歴史に積極的な役割を果たしてきた人たちもたくさんいます。もちろん、職業あるいは制度としての通訳というのが出てくるのは歴史的にはごく最近のことですが、いわば草の根レベルで異言語あるいは異文化間のコミュニケーションの仲介をしてきた人たちというのはたくさんいるわけです。

『ダンス・ウィズ・ウルブズ』── 異文化の仲介者としての通訳者

10年ほど前の米国映画で『ダンス・ウィズ・ウルブズ』（Dances With Wolves, 1990）というのがありましたが、この中に、この点に関連してたいへん印象的なシーンがありました。この映画は米国の南北戦争時代のフロンティアを舞台にしたもので、主演のケビン・コスナー演じるダンバー中尉という北軍の兵隊がフロンティアに1人で出かけていき、そこで出会ったアメリカ先住民のスー族の中に入り、彼らの一員となっていく、というストーリーの感動的な映画です。ちなみに、原作ではコマンチ族という設定だそうですが、映画ではスー族ということになっています。まあ、これだけの説明ですと何が感動的なのかさっぱりわからないと思います

が、とりあえず話を続けます。

で、ダンバー中尉はスー族の中に入って少しずつ彼らの言葉を覚えていくわけですが、もちろん複雑な話になるとコミュニケーションがうまくとれません。ところが、たまたまそのスー族の中に、幼いときにスー族に保護され、そのままスー族の一員として育てられた青い目の女性がいます。彼女にはわずかながら英語が記憶に残っていましたので、部族の長老がダンバー中尉と話をするときなどに通訳者として駆り出されます。

あるとき、スー族が敵対する部族と戦うことになります。ダンバー中尉は、部族の一員として、あるいは一人前の「男」として認められるために自分もその戦いに参加することを強く主張しますが、長老はダンバー中尉に対して、キャンプに残って女子供を守るように命じます。このやり取りは、前述の青い目の女性が通訳するわけですが、彼女はこの長老の言葉を通訳したあと、これは――つまり、女子供を守る役割を与えられることは、スー族の男にとって名誉なことである、と付け加えます。彼女はここで、言葉の通訳だけではなく、文化の仲介者としての役割もはたしているわけです。ダンバー中尉はこの説明に納得してキャンプに残ることになるわけですが、もし彼女の「仲介」がなければ、ダンバー中尉は長老の言葉の真の意味を正しく理解することはできなかっただろうと思われます。実は、このあたりはアメリカインディアン＝未開民族という米国社会のステレオタイプに対する痛烈な批判が込められていたりするのですが、それはさておくとして、このエピソードは、通訳者の役割を考える上で、たいへんおもしろい話題を提供してくれているわけです。言葉だけを訳しても通じないことがたくさんあるんですね。

オランダ通詞――日本における最初の通訳者集団

このような例はいくらでも挙げることができますが、日本においても、民間の、いわゆる草の根レベルで通訳者たちが文化交流に果たしてきた役割は大きなものがあります。ジョン万次郎などもその代表的な例のひとつだろうと思います。日本では、ご存じのとおり、江戸時代以前の戦国時代には平戸にオランダ貿易の拠点があり、いわゆるオランダ通詞とか唐通詞と呼ばれる通訳者集団が活躍していました。彼らは基本的には民間の通訳者です。通詞たちが世襲役人として行政システムに組み込まれていくのは、その後、島原の乱（1637～38年）を経て徳川幕府が鎖国政策をとるようになってからで、鎖国によって貿易の拠点が平戸から長崎・出島に移されると、これにともなって通詞たちも長崎に強制的に移住させられることになり、同時に通詞は公式の制度として整備されるようになっていきます。

当時の通訳者たちは、大通詞（おおつうじ）と小通詞（こつうじ）に分けられ、その後次第に細分化して、大通詞、大通詞見習、小通詞、小通詞助、小通詞並、小通詞末席、稽古通詞、稽古通詞見習などのポジションが作られていきます。今でいえば通訳検定1級とか2級とか、その能力によって序列化されていたわけです。もっとも、世襲制ですから厳密には能力主義と

いうことではなかっただろうと思います。このほかに内通詞（ないつうじ）というのもいて、これは役人ではない民間の通訳者です。幕末期には、オランダ通詞は140名ほどいたそうですから、かなりの集団です（出典：「オランダ通詞」http://www1.parkcity.ne.jp/sito/orandatuuji.html）。

彼らは、一般には「単なる通訳」に過ぎないと思われていることが多いのですが、これは今日でも通訳者についてそういう偏見や誤解がありましてたいへん残念なのですが、実は彼らは、通訳者であると同時に、有能な外交官であり貿易実務家であり、ヨーロッパ、インド、中国等の世界情勢や文明・文化をいち早く日本に紹介する窓口として、政治・経済・文化の各分野にわたって多大な貢献をしてきた集団でもありました。例えば、江戸時代における蘭学の発展は当時のオランダ通詞の存在なくしてはあり得なかったと言われています。有名なところでは杉田玄白の『解体新書』（1774）というのがあります。これは、「ターヘル・アナトミア」という医学書の翻訳で、その後の日本の医学の発展に多大な貢献をしただけではなく、広く蘭学の勃興を促すこととなった記念碑的なものですが、こうした仕事も、実は当時の通詞たちの協力があって初めて可能であったわけです。

この例に限らず、通訳者が、直接あるいは間接的に異文化交流の歴史に積極的な――場合によっては画期的な――役割を果たした例は、たくさんあります。ただし、歴史の表面には出てこないことが多い。通訳者が黒子といわれる所以ですね。

2．同時通訳の誕生

話を少し先に進めます。いままでお話してきた通訳は、いずれも基本的には「逐次通訳」です。誰かがしゃべって、それがひと区切りついたところで通訳者が通訳するというスタイルです。これに対して、本日のテーマである「同時通訳」というのが行われるようになったのはごく最近のことで、20世紀に入ってからです。

1920年代の後半、西側では国際連盟で、東側ではコミンテルン、いわゆる共産主義インターナショナルですね、そのコミンテルンの国際会議で、それぞれ同時通訳というのが初めて採用されます。ただし、国際連盟では翌年から逐次通訳方式に戻しています。うまくいかなかったんですね。それまで同時通訳者を養成していなかったわけですから、いきなりやれと言われたってうまくいかないということだったんだろうと思います。で、翌年から逐次通訳に戻した。しかし、コミンテルンではその後も同時通訳方式でやっています。コミンテルンは、世界を共産化しようということで、いろんな国・地域の人たちを一堂に集めて会議をする。部分的にはロシア語を強制的に学ばせることで共産化を進めるという動きもあったわけですが、別の面ではそれぞれの民族の独自性を尊重するということで、国際会議ではさまざまな言語で会議をする。したがって、通訳者が必要になります。当時のソビエト連邦では、そういうことで通訳者

を組織的に養成していました。

その後、第2次大戦後にドイツで国際軍事裁判、いわゆるニュールンベルグ裁判（1945年11月～1946年10月）が始まります。この裁判では、本格的に同時通訳が採用されました。西側では、一般にこのニュールンベルグ裁判が同時通訳の起源とされています。本格的に同時通訳を導入するためには専用の機械装置が必要になりますが、これはIBMの協力で開発されています。それ以前にもごく原始的なものはありましたが、本格的な同通システムはこの時に初めて作られ、これを機に同時通訳というコミュニケーション手法が広く知られるようになりました。

なお、ニュールンベルグ裁判で同時通訳者を迅速かつ組織的に手配できたのはソビエト連邦だけだったそうです。西側はどうしたかというと、当然、同時通訳者の養成が行われていませんから、言葉ができる人をとにかく集めて、OJTで実際の裁判をしながら養成していったというのが実情だったそうです。ラムラーさんという、当時若干22歳で英語とドイツ語間の同時通訳者としてニュールンベルグ裁判に関わった方がいます。数年前に日本に来られて講演をされたのですが、この時にニュールンベルグ裁判について詳しい話をされています。非常に貴重なお話でした。もう90近い年齢ですが、ご存命のうちに話を聞きたいということでお呼びして、講演録も出版されています（松縄2007）。それを読みますと、当時どういうことがあったか当事者の口から語られていまして、非常に面白い。ラムラーさんはわずか22歳でこういう軍事裁判の通訳をすることになったわけですが、要するにほかに誰もできる人がいないわけですね。彼は英語とドイツ語の両方とも堪能で、頭の回転も速い。軍事裁判についても多少の知識があった。そういうことで、とにかくやれということでやったそうです。他の言語の場合も事情は似たようなもので、例外はわずかに旧ソビエトのみ。先ほど申し上げましたとおり、ソビエト連邦ではそれまでに同時通訳者の養成がきちんと行われていましたので、特に大きな問題なく同時通訳者を送り込むことができたということだそうです。

一方、日本では同時期に極東軍事裁判――いわゆる東京裁判が行われていますが、これは基本的に逐次通訳で行われています。極東軍事裁判については映画がいくつか作られていて、その中で同時通訳が行われているような描写がありますので、この裁判でも同時通訳が行われたという印象が一般に広まっていますが、当時の関係者らを取材して論文を書いた人がいまして、その人によれば、基本的には逐次通訳方式であったことが確認されています（渡部1998）。映画のほうは、まあ、映画上の演出ということでしょう。もっとも、実際は部分的に同時通訳が行われたセッションもあったようですが、基本的には逐次通訳で行われていたと考えていいと思います。

アポロ11号の同時通訳

いずれにせよ、ニュールンベルグ裁判でも東京裁判でも、ごく特殊な場で限られた人たちを対象に行われていますので、一般の人が同時通訳に触れる機会というのは、ほとんどありませ

んでした。日本で同時通訳が一般に知られるようになったのは、皆さんご存じの1969年のアポロ11号月面着陸の、あの歴史的な衛星中継です。これが、一般の人が同時通訳に触れたおそらく最初のイベントだったろうと思います。

この衛星中継は、NASAの管制センターとアポロ11号のやり取りがNHKの衛星回線を通じて全国的に放送されたもので、このときに西山千さんによる同時通訳が行われました。西山さんは数年前に95歳でお亡くなりになられましたが、幸い、その少し前に日本通訳学会（現・日本通訳翻訳学会）というところで彼をお招きしてお話をお聞きする機会がありました。

この衛星中継については、今日ここにおいでになっている方の大半が、おそらく実際に目にされたのではないかと思います。当時私は高校生だったと思いますが、何かとても現実離れした光景が目の前で繰り広げられているという、そういう印象を受けた記憶が残ってます。その当時は、まさか私がその後、通訳に関わるようになるとは夢にも思ってませんでしたが、あるいは潜在意識の中に何か残っていたのかもしれません。

西山さんの通訳で、「こちらヒューストン、こちらヒューストン、すべて順調」という名セリフがありますが、これが当時有名になりました。まあ、今から振り返ってみると、よく聞き取れないところはほとんど「すべて順調」と訳されていたような気もしますが、当時、この「すべて順調」というセリフが子供たちの間で流行りまして、学校で先生に「おい、宿題やってきたか？」なんて聞かれると、「すべて順調」と答える子供がたくさんいました。

図1　アポロ11号の同時通訳をする西山さん（©NHK）

図2　月面に第1歩を記すアームストロング船長（©NHK/NASA）

もうひとつ有名なエピソードがあります。例の“That's one small step for（a）man, one giant step for mankind.”というニール・アームストロング船長の発したセリフにまつわる「誤訳」騒動です。これはビデオ映像が残っていますので、この場面を聞いてみます。

この方（図1）が西山さんで、こちら（図2）が月面に第1歩を記すアームストロング船長の姿で、といっても画面がぼんやりしていてよくわかりませんが、ちょうどこの場面で前述の“That's one small step for（a）man, one giant step for mankind.”というセリフが発せられています。いまお聞きいただいたとおり、相当な雑音が入っていて、西山さんはたいへん困難な状況で通訳をされていたわけですが、西山さんは、アームストロング船長の歴史的第一声を“That's one small step for（a）man”と聞いたところで、「これは人類に

とって小さな一歩」と訳した。“for（a）man”の“a”がよく聞こえなかったわけです。今から聞いてもこれは聞こえませんので無理はありませんが、無冠詞の man ということで「人類」と訳したわけです。ところが、その後すぐに“one giant step for mankind.”（人類にとって大きな飛躍）と続く。ここで、「あ、間違った」と気付いたそうですが、時すでに遅し。すでに「人類にとって小さな一歩」と訳した後でしたので、そのままむにゃむにゃと誤魔化したということだったそうです。

で、その日の夜の NHK ニュースでもう一度、こんどはちゃんと分かっているので、「ひとりの人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍」と訳し直した。こういう誤訳は同時通訳にはつきもので、しかも当時の音声はひどいもので、ものすごい雑音がある。そういう状況で仕事をしているわけですから、こういう問題を取り上げて誤訳だと騒ぐのはフェアーではないわけですが（そもそもアームストロング船長が言い間違えたという説もあります）、いずれにせよ、日本における同時通訳の歴史というのは、実質的にはこの時から始まり、やがて 1990 年の湾岸戦争における史上初の戦争の実況中継とその同時通訳へとつながっていきます。

湾岸戦争の同時通訳

湾岸戦争はご存じのとおり 1990 年に始まりますが、翌 91 年にイラクの空爆がありまして、その様子がそのままお茶の間に実況中継されました。これは、かなりショッキングな出来事で、戦争の様子が、まるで映画でも見ているような感覚で目の前で繰り拡げられる。CNN もさすがに死体を見せたりするのは控えたようですが、米国政府としてもあまり戦争の現実をそのまま見せてしまうと政治的に困ったことになるということで、かなりの報道規制を敷いたであろうことは想像に難くありませんが、いずれにせよ、一方では戦争のショー化ということで批判もありますが、一般の視聴者が戦争の現実をごく身近なものとして感じられるようになったという意味で、画期的な出来事であったと思います。まあ、われわれがいま話題にしているのは同時通訳の歴史ということですので、湾岸戦争の実況中継の評価についてはさておくとして、この映像は CNN のネットワークを通じて世界中に配信され、それぞれの国で同時通訳されたわけです。これも簡単なビデオクリップがありますので、ご覧ください。

＞（ビデオ映像：図 3）

こういう同時通訳は、まさに生の同時通訳でして、予行練習も原稿もなく、いきなり映像と音声が入ってきますので、相当神経を使うたいへんな仕事です。もっとも、事前にあらかじめいろいろと下調べをしておくことができますし、放送通訳をしている人たちは仕事柄、時事問題にはかなり詳しくなりますので、まったく何の準備もないままやるというわけではありませんが、それしても簡単な仕事ではありません。ちなみに、この映像を同時通訳しているのは S さんという方で、元高校の英語の先生をやっておられた方です。いわゆる帰国子女というわけ

図 3　イラク爆撃の実況中継
（©CNN/NHK）

［音声］

And there was a direct hit, and at that point, not only

その時に 直接 爆撃があって

I felt crush right again my body, but I also heard the sounds ...

直接 振動を感じただけでなく 音も聞こえました…

ではなくて、努力して英語を身に付けた人です。ある事情から教師をお辞めになって、その後、猛勉強して通訳者になられたのですが、非常に努力型の人です。これは通訳者に共通している点だと思いますが、みなさんたいへん努力家で勉強家ですね。仕事の前には十分に下調べをしますし、仕事が終わってからもきちんと復習するという人が多い。いま私は学生を教えているわけですが、プロのほうが学生より何倍も何十倍もコツコツと勉強しています。学生にはこういうプロの通訳者の地道な努力をぜひ見習って欲しいと思っているのですが、まあ、なかなかうまくいきません。

話を戻しますと、こういう湾岸戦争のような国際ニュースの同時通訳ができる体制が十分に整うまで、西山さん以後、およそ 20 年ほどかかっています。現在、NHK には自前の同時通訳者養成のための学校（NHK 情報ネットワーク国際研修室）がありまして、そこで通訳者を養成しているのですが、日本での通訳者の組織的な養成は 1964 年の東京オリンピックを契機として始まります。先ほどのアポロ 11 号の実況中継の少し前ですね。東京オリンピックのために通訳者・翻訳者が大量に必要だということで、この頃から、いわゆる民間の通訳者養成学校が続々と ── といっても主なところではサイマル、コングレ、アイエスエス、インタースクールといったあたりですが ── そういう養成機関ができてきて、そこで組織的な養成が始まります。大学では当時、国際基督教大学（ICU）で斉藤美津子先生が通訳教育をすでに始めておられましたが、全国的に広まっていったのは 1970 年代以降のことになります。それからおよそ 30 年後の 2005 年度の調査（染谷・斎藤他 2005）によると、全国で 105 校の大学で通訳の授業が開設されていますので、ずいぶん増えてきました。ただし、これはウェブ上でカリキュラムやシラバスを公開している大学に限っていますので、実際にはもっと多いだろうと思います。

研究のほうはどうかといいますと、おそらく通訳あるいは通訳教育に関する研究らしいものが初めてまとまって出てきたのは、上智大学を中心とする研究者がまとめた「外国語教育の一環としての通訳養成のための教育内容方法の開発に関する総合的研究」（渡部昇一他 1991）と題する科研費研究の報告書だったろうと思います。この報告書は、研究代表者自身がそのよう

なことを書いているのですが、研究報告というよりはいろいろな実践報告の寄せ集めという感じのもので、理論的あるいは学問的にはあまり見るべきものはないのですが、これがひとつのきっかけとなってその後の研究への道を開いたということは言えるのではないかと思います。

同時通訳は神業か？

そろそろ今日の話の本題に入らないといけませんが、西山さんによるアポロ 11 号の同時通訳は当時「神業」と評されました。初めて同時通訳を目の当たりにした一般視聴者にとって、あの通訳はまさに神業的なこととしてとらえられたのは無理もなかったと思います。実際、当時の笑い話が沢山あって、人間にこんなことができるわけがないということで、これはいったいどういう機械がやっているのかと、そういう問い合わせが NHK にたくさんあったそうです。まあ、テレビを見ていれば西山さんがやってるんだと分かりそうなものですが、どうも信じられないということでしょう。湾岸戦争の同時通訳あたりになると、さすがに「ニシヤマ」という機械はどこで売ってるんだ、などと言い出す人はいなくなりますが、それでも、一般には「同時通訳＝神業」という印象はかなり根強く残っていると思います。

「神業」というのが、それほど難しいことという修辞的な意味で使われている分にはとくに問題はないのですが、われわれの立場からすると、同時通訳は決して「神業」ではない。神業というのは要するに説明のつかない奇跡のようなもの、ということですが、われわれは同時通訳はある一定のルールに基づいた、理論的に説明可能なものであり、適切な訓練によってそのルールを習得すれば、基本的には通常の言語能力を持った人であれば、誰にでもできるものである、と考えています。長い前置きになりましたが、これが今日の本題ということになります。

3．同時通訳のメカニズム ── 同時通訳はなぜ可能なのか

同時通訳にはある一定のルールがあって、適切な訓練によってそのルールを習得すれば基本的には誰にでも同時通訳はできると言いましたが、皆さんの中には、本当かい、まあここは大阪ですから「ほんまかいな？」ということになるんでしょうが、そう思われた方も少なくないのではないかと思います。そこで、学生による同時通訳の例をちょっと見てもらいます（図 4）。これは全く普通の、ごく一般的な学生の例です。

このビデオは、私が前任校で勤務していたときのものですが ── ちなみに、私は 2 年前に前任校から関西大学に移ってきました。関西大学では通訳の授業は今年から始めたばかりでまだ実績がありません。ちょっと宣伝させていただきますと、関西大学の外国語学部では、再来年あたりから学部内に「通訳翻訳プログラム」を立ち上げて、本格的に通訳翻訳訓練を始めようということで、いま盛んに議論をしているところです。

現在は、その前に、プログラムとしては立てていませんが、授業としていくつか置いてある

図4　学生による同通演習の様子

という状態です。そういうことで、前任校時代の映像を見ていただいたわけですが、これは3年次生の授業の例で、同時通訳の練習を始めて3ヶ月目ぐらいですね。授業では、毎回、最初の30分くらいを使って学生に英語でスピーチをさせ、それを別の学生が日本語に同時通訳するということをやらせています。スピーチ自体は2～3分程度の短いもので、これは任意のトピックで事前に準備させます。スピーチの前に5分ほど打ち合わせの時間を与えますが、通訳担当の学生はこの間にスピーチの概要を尋ねたり、専門的な語句が出てこないかどうかチェックしたりします。ただし、スピーカーの用意した原稿は見てはいけないことになってます。

ということで、やったわけですが、いま聞いていただいて、けっこううまくできていると思いませんか？ この3か月前には、こういうことはもちろんできなかったわけです。わずか3か月の訓練で、このくらいできるようになります。もちろん、スピーチの内容はごく一般的なもので、難しい単語もほとんど使われていません。発話速度もおよそ120 words per minute程度の、ごくゆっくりしたものです。それでも、練習なしでいきなりやらせても、これはできません。しかし、いま見てもらったように、3カ月ぐらい訓練すると、このくらいのものであれば、だいたい8割程度の正確さできちんと同時通訳することができるようになります。先ほど、同時通訳は、一定のルールを習得すれば、基本的には普通の言語能力を持った人なら誰でもできるようになると言いましたが、これがそのひとつの例です。問題は、そのルールとはどういうもので、どうすればそれが習得できるのか、ということになります。以下、この点について話を進めていきます。

同時通訳の難しさ

その前に、同時通訳の難しさについて整理しておきます。私のクラスでは、最初の授業で学生に次のような質問をします。

Q 1. 逐次通訳に比べて、同時通訳にはどういう特殊性があるか。
Q 2. そのような特殊性から、一般に同時通訳を行う上でどのような問題点・難しさが予想されるか。

今日は、できれば皆さんに同じ質問をして議論ができればと思ったのですが、まあ、ここで初めてお会いしたばかりですし、これだけ大勢いると発言もしにくいでしょうから、先に答えを出しておきます。次のスライド（図5）をご覧ください。

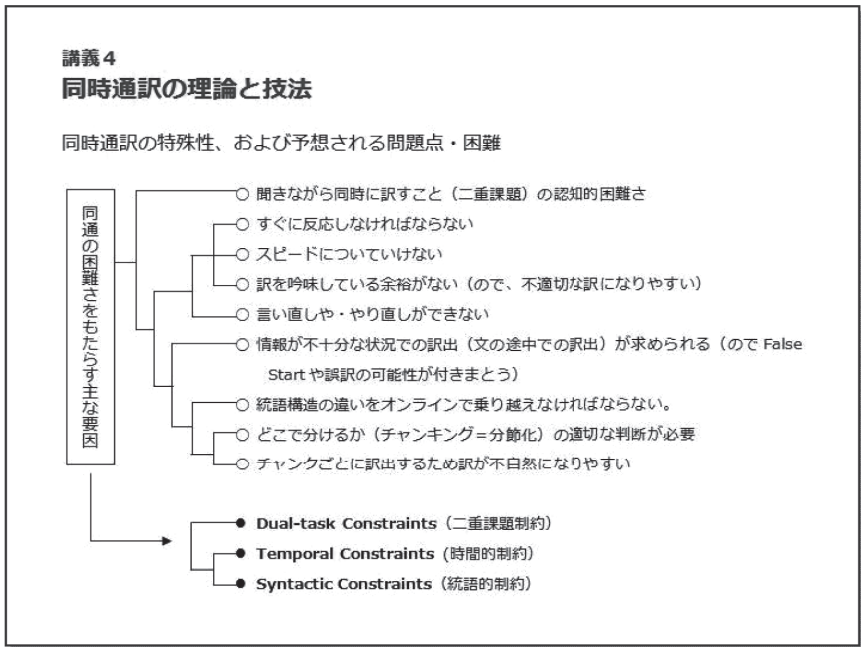

図5　同時通訳の困難さをもたらす主な要因

これはいつも授業で使っているものですが、同時通訳の困難さについては、だいたいこんな感じでまとめられると思います。まず最初に「聞きながら同時に訳すこと（二重課題）の困難さ」とあります。たしかに、これは難しそうです。普通は、聞くときは聞く、話すときは話すということで、両方同時にやるってことはほとんどないだろうと思います。次に、「すぐに反応しなければならない」とあります。同時通訳ですから、じっくり時間をかけて訳を考えている暇はありません。ここが翻訳と大きく違うところですね。その下に「スピードについていけない」とありますが、もちろんスピードが速くなればなるほど難しくなります。これは同時通訳の体験がなくても、直観的にわかります。一般に、英語の場合、同時通訳に適した速度というのは 120 ± 20 words per minute（WMP）くらいで、140 WPM を超えるとエラーや情報漏れが目立って多くなってきます。

それから、この2番目とも関連しますが、「訳を吟味している余裕がない」わけですから、どうしても「不適切な訳になりやすい」ということがあります。その上、基本的には「言い直しや、やり直しができない」わけです。先ほどの西山さんの例でもそうですが、基本的にはいったん口に出したらそれで終わり。もちろん言い直してもいいんですが、それは次の情報を聞き逃すというリスクをともないます。また、何回も言い直しをすると、聞いているほうも、あいつ大丈夫かいな、ということになってきます。

次に、「情報が不十分な状態での訳出（文の途中での訳出）が求められる」とあります。つまり、同時通訳は、発言を最後まで聞いて、はいわかったといって訳すのではなく、文の途中か

ら訳し始めますので、常に情報が不十分な状態での訳出を余儀なくされるわけです。そういう難しさがあって、そこからfalse startとか誤訳の可能性というのが常につきまとうわけです。このフォールス・スタートというのは、スポーツでいう「フライング」のことですね。言語学では、例えば、Did you... と言いかけてやめて、Didn't you... と言い直して発話を再開するような現象を指します。場合によっては、言いかけた発話（および発話プラン）を全く放棄して、新たな表現・構文でそっくり言い直すということもあります。こういう言い直し現象がなぜ起こるのか、このときに頭の中で何が起こっているのか、というのはたいへん面白い研究テーマなのですが、いずれにせよ、こういう言い直し現象をフォールス・スタートと言います。

それから、統語構造の違い。これも大きな問題です。英語と日本語は、いわば鏡像関係にありますので、例えば日本語では「東京都渋谷区渋谷3-1-14」というのに対して、英語では“3-1-14, Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo, Japan”となって、まるで順番が反対ですよね。同時通訳ではこういう統語構造の違いを、オンラインで乗り越えないといけないという難しさがあります。オンラインでというのは、聞いているその場その場でということです。そのためには、発話を適切なユニットごとに区切って処理し、訳出していくわけですが、これを「チャンキング」といいます。ただし、この「適切なユニット」というのをどう判断するか、これはなかなか難しい問題です。これについては後でもう少し詳しくお話しします。

いま、ざっと同時通訳にともなう困難さ、難しさというものを見てきましたが、これはこういうふうに（図5下部参照）「3つの制約」として整理することができます。ひとつ目はDual-task Constraintsつまり「二重課題制約」。聞きながら同時に訳すことの認知的な制約ということです。実際には「二重」ではなくて「多重」というほうが正確ですが、とりあえず複数作業の同時遂行ということで、理解するだけとか発話するだけの単一タスク（single task）と比べて格段に認知的負荷が高いわけで、それゆえの制約がいろいろとあるわけです。2つ目はTemporal Constraints「時間的な制約」。これは発話速度のこととか、訳を吟味している時間がないとか、言い直しができないとか、そういう側面について言及しています。同時通訳というのは時間的な制約がなければそんなに難しくない。というか、難しさのかなりの部分が解決します。My...name...is... のようにゆっくり話してくれれば、学生でもそこそこ対応できます。ただし、これが速くなればなるほど難しくなる。3つ目がSyntactic Constraintsつまり「統語的制約」ですね。さきほど言いましたような、文の構造上の違いに由来する制約です。以上が、同時通訳に関わる「3つの制約」ということになります。

さて、問題は、これらの制約を克服するためにはどのような能力とか技術、方略が必要で、それはどのような学習あるいは訓練によって習得できるのか、ということになります。この3つの制約は、どうやってもなくならないわけです。制約そのものを排除できないとすれば、われわれとしては、これを乗り越えるための方法を、情報処理方略とか訳出方略という形で乗り越えなければならない。われわれはこれを「同時通訳文法」と呼んでいますが、これを発見し

習得するという方向でこの制約を乗り越える以外に、方法はないだろうと考えています。

いま「同時通訳文法」といいましたが、「文法」というのは言語の規則のことを指しますので、これは要するに「ルールに基づく同時通訳」という意味で、そのルールを体系化したものを仮に「同時通訳文法」と呼んでいます。われわれが目指しているのは、言語学的または認知的な、何らかの原理原則に基づいた説明可能な同時通訳というものであって、特定の人にしかできない「名人芸」とか「神業」としての同時通訳ということではないということです。Rule-based Interpreting といいますか、ルールに基づいた通訳ですね、これを目指しています。もちろん、こういうルールは、ルールとして学習するだけですぐに使えるようになるわけではありませんで、実際の通訳体験の中で、または教室での疑似的な体験の中で、これを発見的に習得し、その上で繰り返し訓練していかないと使えるものにはなりません。これは同時通訳に限らず、どの分野でも同じことです。

4．同時通訳を可能にするルールと「同時通訳文法」

4.1　ケーススタディ１

「同時通訳文法」とは具体的にどういうことか、ひとつ例を見てみます。この英文を訳してみてください。

＞ You must finish your homework before going to bed.

そこの方、いかがでしょうか？

＞（聴衆）「寝る前に宿題を済ませなさい」ということだと思います。

はい、そのとおりです。簡単ですよね。標準的な答えとしてはそういうことになります。ただし、これを同時通訳するとなると、少し訳し方が違ってきます。同時通訳では“You must finish your homework”と聞いたら「宿題を済ませなさい」と訳出して、次の“before going to bed.”で「寝るのはそれからですよ」とまとめる、ということになります。原文を、適当な意味のまとまりごとに句切って訳出していくわけです。いまやっていただいたように、最後まで聞いてひっくり返って訳すということですと、同時通訳にはなりません。なるべく短いチャンクごとに処理していくわけです。

問題は、この「適当な意味のまとまり」というのをどう判断するか――もちろん、この場合の「適当」というのはいい加減にということではなくて、適切にということですが、これをオンラインで直感的に判断できるようにならないといけません。われわれは、この適切な意味のまとまりの基本的な単位を「命題」と呼んでいます。英語では proposition といいます。後でもう少し詳しく説明しますが、「何が／誰が（＝主題 Theme）、どうだ／どうした（＝題述 Rheme）」という必要最小限の文要素を備えたものと考えてください。ということで、これが同通文法の最初のルールです。

＞［**Rule 1**］同時通訳は原則として「命題」を処理単位とする。

入ってくる情報を命題単位で切り分けた上で、情報を再構成していくことが同時通訳の基本ということです。先ほどの例を使ってもう少し詳しく説明します。

＞ You must finish your homework before going to bed.

まず、この You must finish your homework ここが一番小さな命題単位です。これは FINISH（YOU, YOUR_HOMEWORK）のような命題形式に書き換えることができます。命題は一般に

＞ PREDICATE（ARGUMENT-1, ARGUMENT-N）

という論理形式で表現します。日本語にすると

＞述語（項1, 項n）

ですね。Predicate は述語（動詞・形容詞）で、Argument は述語が文を構成するために必要とする項のことです。項というのは主語とか目的語になるもので、主として名詞・名詞句です。n とあるのは理論的には項はいくつあってもいいので n となっているのですが、普通は3つまでですね。いわゆる2重目的語構文では主語のほかに目的語が2つありますので、全部で3つの項が出てきます。この FINISH（YOU, YOUR_HOMEWORK）の場合は FINISH が述語で、これは2つの項（主語と目的語）を要求する2項動詞（two-place predicate）ですので

＞ FINISH（WHO, WHAT）

＞終える（誰が, 何を）

という構造をもつ述語ということになります。この WHO のところに主語になる（または主格という格役割を持つ）名詞・名詞句が入り、WHAT のところに目的語になる（または目的格という格役割を持つ）名詞・名詞句が入るわけです。

先ほどの You must finish your homework before going to bed. という文を発話した人は、まず「誰かが何かを終える」という事態を頭の中で構成し、これを FINISH という述語で表現しようとしたわけです。この時点で、自動的に頭の中に FINISH（YOU, YOUR_HOMEWORK）という命題が構成されます。ただし、この場合は FINISH（YOU, YOUR_HOMEWORK）は義務的なイベントとして構成されていますので、正確には MUST（FINISH（YOU, YOUR_ HOMEWORK））という構造になります。この命題構造が、具体的な発話のベース、つまり基底構造になるわけですが、この場合はもうひとつ別のイベントが想定されています。before going to bed. の部分です。さて、これも「命題」ということになるでしょうか？

命題というからには、主題と題述が揃っていないといけませんが、ここでは題述部に対応する要素はありますが、「何が／誰が」という要素が出てきていません。これは、すでにお分かりのとおり GO（YOU, TO_BED）の YOU が省略されているわけです。先行命題と同じ項の繰り返しになりますので、表面には出てきていないということです。言語学ではこういう省略要素をしばしばϕという記号（カラ記号）で表し、必要に応じて ϕ^i のようなインデクス――標識

ですね、これを右肩に添えて先行詞との対応関係を示します（以下の図参照）。ということで、先ほどの例文は、次のように２つの命題（P1, P2）からなる発話で、この２つの命題の関係、この場合は「P1 が先で P2 がその後」という時系列関係ですが、そのような解釈を before という単語が指定している、というふうに分析することができます。

You must finish your homework before going to bed.
↓
P1：　MUST（**FINISH**（YOU^{i}, YOUR_HOMEWORK））
　　BEFORE
P2：　**GO**（ϕ^{i}, TO_BED）
↓
P1 THEN P2
↓
宿題を済ませなさい。寝るのはそれからですよ。

一般に、訳は、原文そのものではなく、この基底構造から作り出します。基底構造にあるのは意味概念ですから、これを具体的な言語表現に落とし込む際には、語句の選択やレジスターの選択 —— 命令調で言うのか、丁寧に言うのかといった選択ですね、そういうレベルでさまざまな可能性があります。たとえば、この例では before が「それから」と訳出されていますが、どの辞書を見ても before に「それから」という意味を当てているものはないだろうと思います。なぜそういう訳になるのかというと、ここでは before というのはいわゆるリレーショナル・ターム（relational term）で、P1 と P2 という２つのイベントの時系列関係を表わしている。これは先ほど述べました。Before と聞いたら「～の前に」と決まったように訳すというのではなくて、その「意味」を文脈に応じて適切に目標言語で表現するということです。そうすると、実際にはいろんな訳が可能です。例えば、「宿題を済ませてから、寝なさい」とか「宿題が終わったら寝ていいよ」とか、「宿題が先でしょ。ベッドに行くのはそれからです」とか、いろいろ可能ですが、最終的にどういう訳を選ぶかは、誰が、誰に対して、どういう状況で言っているのかというコンテクストによります。ちなみに、このような、before を「それから」と訳すような訳出方法を、functional translation ＝機能的翻訳といいます。ある語句の辞書的な意味ではなくて、その機能＝意味上の機能を訳出するという意味です。Word-based translation（lexical translation）に対する concept-based translation（conceptual translation）ということもあります。

4.2　ケーススタディ2

なかなかややこしい話になってきましたが、こんなこと言わなくても、この程度の英文なら最後まで聞いて訳してもとくに問題ないだろう、とおっしゃる方もいると思います。まあ、それはそうなんですが、では次の例ではどうでしょうか。

＞A strong earthquake hit a wide area of Japan from Hokkaido to the Chugoku Region at about 11:08 p.m. Thursday.

「強い地震が、木曜の午後11時8分ごろ、北海道から中国地方にわたる日本の広い地域を襲った」という意味の文章です。もちろん、このあとにも同じような文章がずっと続くという想定ですが、これを同時通訳するとなるとどうでしょうか。やはり、このくらいの長さになりますと、どこかで区切りながら訳さないとどうにもなりません。で、これを適当に区切って訳すとすると、どこで区切るのがいいでしょうか。

先に答えを言ってしまいますと、この発話は次のように区切ることで、3つの命題――または命題相当のユニット――ごとに順次訳出していくことができます。

P1：A strong earthquake hit a wide area of Japan /
P2：from Hokkaido to the Chugoku Region /
P3：at about 11:08 p.m. Thursday. //

このうちP1は「何が、どうした」という要素が揃っていますから、「命題」として切り分けることができることはわかります。しかし、P2とP3はどうでしょう。この2つは命題といえるでしょうか？　われわれの理論では訳出は命題単位ということになりますので、これが命題でないということになると、はなはだ都合が悪いわけですが、実はこの2つは、表層構造ではfrom Hokkaido to the Chugoku Regionおよびat about 11:08 p.m. Thursdayと、いずれも前置詞句で、いわば文の断片に過ぎませんが、基底構造では次のように命題としての構造を備えていると考えます。

P1：HIT（$_{\text{THEME}=}$ STRONG_EARTHQUAKE^{i}, $_{\text{TARGET}=}$ WIDE_AREA_OF_JAPAN）
P2：___（$_{\text{THEME}=}\phi^{i}$, $_{\text{LOCATION}=}$ FROM_HOKKAIDO TO_CHUGOKU_REGION）
P3：___（$_{\text{THEME}=}\phi^{i}$, $_{\text{TIME}=}$ AT_ABOUT_11:08PM ON_THURSDAY）

P2の主語（＝主題Theme）は、ここではϕ^{i}というインデックス付のカラ記号（ϕ）で表されています。要するにSTRONG_EARTHQUAKE^{i}がP2の主語だということです。先行するP1の主語がそのまま継承されているわけです。これは、P3についても同じです。同じ主語・主題がそのまま継承されているわけですから、ここではϕ^{i}の代わりに代名詞のitを使って、

IT^i としても同じです。述語はどうでしょうか。ここではいずれも下線で表されていますが、これは具体的な語彙項目としては表示されていない述語要素、と考えてください。何もないわけではなくて、表示形式を与えられていない述語＝ゼロ述語がある、と考えます。こう考えれば、P2 も P3 も立派な命題として処理することができます。この命題レベルで暫定的に英日の言語変換をすると、およそ次のようになります。

P1：HIT（$_{主題}$＝強い地震^i，$_{対象}$＝日本の広い地域）
P2：___（$_{主題}$＝ϕ^i，$_{場所}$＝北海道から 東北地方［にかけて］）
P3：___（$_{主題}$＝ϕ^i，$_{時}$＝午後 11 時 8 分頃 木曜）

あとは、これを命題ごとに適格な、つまり well-formed な日本語として再構成すればいいわけです。P1 は

（強い地震$^{i\,が}$（日本の広い地域^{を}（HIT した）））

ということで、この「が」とか「を」とかの格助詞はそれぞれ主題と対象をマークする格助詞ですので、自動的に入ってきます。HIT はここでは「地震」という主語＝主題に最も適切かつ自然に対応する動詞、例えば「襲った」のような訳語を選択することができます。ただし、例えば「強い地震が、日本の広い地域…（を HIT した）→で観測された」のように、発話中にモニターしながら、適宜、訳語を調整することもできます。P2 は

（これ$^{i\,は}$（北海道から 東北地方にかけて（HIT した）））

ということですし、P3 は

（これ$^{i\,は}$（午後 11 時 8 分頃 木曜^{の}（HIT した）））

ということになります。P2 と P3 の主題は、いずれも既出の、既知の主題ですので、「は」という格助詞でマークすることになります。これは、「昔々、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山に…。おばあさんは川に…」というのと同じです。

もちろん、ここまでは概念レベルでの表示ですので、これをそのまま訳として使うわけではありません。さきほどの例と同じように、発話プランから実際の発話に至る過程で適宜モニターし、より適格な日本語として調整した上で、最終訳を構成するわけです。調整済みの訳の例としては、次のようなものが考えられます。

（強い地震^{i}が（日本の広い地域で（観測されました）））
（これ^{i}は（北海道から 東北地方にわたる（もので）））
（ϕ^i（木曜の午後 11 時 8 分頃（のことです）））

P2 の訳のポイントは、「これ」という仮主語を入れたことです。これによって、P2 は命題と

しての形を与えられています。ただし、P3ではこれを改めて繰り返す必要がありませんので、省略しています。P2とP3の基底構造で仮定したHITという述語も、（これは（北海道から東北地方にわた（って観測された））とか（ϕ^i（木曜の午後11時8分頃（に観測された））のように、わざわざ繰り返す必要がありませんので、その代わりに、「…もので」「…のことです」のような形で、話に整合性をつけながら適宜まとめています。こういうオンライン処理が、上手な訳を産出する秘訣と言えば秘訣ですが、基本になるのはただいまご説明したような命題化処理、つまり入力情報を命題単位で切り分けることです。これがうまくできないと、訳の作りようがありません。

ところで、このP1ですが、これは最後まで待たずに、途中で訳出を始められそうだと思いませんか。仮にこれを2つのチャンクに分けて訳すとしたら、どこで分けたらいいでしょうか？

＞ A strong earthquake hit a wide area of Japan /（from...）

はい、そうですね。答えはhitの前です。区切りはここにあります。この文節では、主動詞hitが出てきた時点でその前のA strong earthquakeの意味役割 —— この場合はhitを主要部とする動詞句の主格主語ということですが —— これが確定します。したがって、A strong earthquake hit . . . と聞いた時点で「強い地震が」と訳出することができます。こういう処理を「即時処理」と言います。 ただし、HITはこの時点ではまだ訳せません。なぜかというと、この時点ではHITの意味、この文脈での意味（context-specific meaning）ということですが、これがまだ確定していないからです。この意味を確定するためには、HITの目的語が出てくるまで待たないといけません。この動詞は、先ほど触れたFINISHの例と同じように、主語と目的語を義務的に必要とする2項動詞ですから、この2つの項が確定して始めて、その文脈での具体的な意味が確定するということになります。したがって、HITの意味を確定するためには、その目的語であるa wide area of Japanのところまで聞かないといけません。a wide area of JapanがHITという動詞の最小統率範囲の名詞句であることは、その後のfromを聞いた時点でわかります。

$(_{S}\ (_{NP}$ STRONG_EARTHQUAKE $(_{VP}\ (_{V}$ HIT $(_{NP}$ WIDE_AREA_OF_JAPAN / $(_{PP}$ FROM . . .)))))))

なお、統率（govern）というのは言語学の用語で、皆さんあまり聞き慣れないと思いますが、文法的な支配関係を指します。例えばTaro loves Hanako. という文があった場合、主語のTaroは3人称単数現在の-sを統率し、loveは（その目的語である）Hanakoを統率していると言います。いまわれわれが議論している例文の場合は、HITという動詞がWIDE_AREA_OF_ JAPANという名詞句（NP）を統率している、ということになります。

話を戻しますと、この文節を最小単位で同時通訳する場合は、A strong earthquake（hit...）と聞いた時点で、「強い地震が」と訳出し、その後はHITを一時的に記憶にとどめておいて、a

wide area of Japan（from...）と聞いたところで、「日本の広い地域で観測されました」と続けるということになります。こういう処理を「遅延処理」と呼びます。ちょっと遅れて、必要な情報を待ってから処理するので、遅延処理というわけです。この簡単な例からでも、同時通訳には２つの基本的な訳出方略があることが分かります。１つは先ほど触れました「即時処理方略」。もう１つがこの「遅延処理方略」です。実際、同時通訳というのは、基本的にはこの２つの訳出方略の組み合わせで進行していきます。

話がなかなかややこしくなってきましたが、いまお話した簡単な例だけでも、われわれは少なくとも次のようなルールを同時通訳文法の仮説として立てることができます。このうち、最初のルールは、すでにお話したとおり、演繹的なルールではなくて、われわれが議論の前提として設定したルールです。ルール番号はとりあえず適当に加えたものです。

［**Rule 1**］（処理ユニット）同時通訳は原則として「命題」を処理単位とする。

［**Rule 2**］（文の情報構造と命題化方略）自然文は、「何が（＝主題）、どうした（＝題述）」という要素が揃っている場合に「命題」として切り分けることができる。与えられた自然文をそのような枠組みで（必要であれば強制的に）再構成することを命題化方略と呼ぶ。

［**Rule 3**］（主題部の訳出）主題部は題述部に入った時点で直ちに訳出することができる。

［**Rule 4**］（他動詞の処理）述部の動詞が他動詞である場合、その動詞が統率する目的語名詞句の終結を待って初めて動詞の（そのローカルコンテクストでの）意味が確定する。したがって、訳出は当該の目的語名詞句が終わってから行うのを原則とする。

［**Rule 5**］（前置詞句の処理）主命題に続く前置詞句は「文（命題）相当の前置詞句」として処理することで、適切な訳出処理が可能になる。この方略＝命題化方略＝は、分詞句や不定詞句等にも適用することができる。

これ以外にも、沢山のルールが考えられますが、これらの例でも明らかなとおり、同時通訳が可能なのは、その背後に同時通訳という作業に固有な制約を乗り越えるためのさまざまな訳出方略や情報処理方略があるからであり、こうした方略の体系を「同時通訳文法」と呼んでいるわけです。これを毎日の練習の中でひとつづつ見つけていく、そして、次に同じものが出てきたら、そのルールを適用してみる。これを繰り返していくことで、少しづつパフォーマンスが向上していくのではないかと、こう思うわけです。

何でもそうですが、ただ知識として知っているだけではなかなか実践には結び付きません。「知っていること」を「出来ること」に転換するためには、やはりそれなりの訓練が必要です。エリクソンという、エキスパート研究の第一人者がいます。この人は、世界中のいろんな分野のエキスパートについて研究している人で、例えば芸術家とかスポーツ選手とか、一流と言われる人たちがいかにして一流となったか、ということを研究しているんですが、彼によると、

エキスパートになるためには「最低10年にわたる集中的かつ目的を持った訓練」（intense and deliberate practice extended for a minimum of 10 years）が必要だと言っています（Ericsson, 1993）。これを“Ten-Year Rule”と呼んでいますが、同時通訳でも一流と言われるようになるには、やはり10年くらいはかかると思います。体験的にも、周りの同時通訳者を見ても、だいたいそんな感じがします。ですから、いまご紹介したようなルールをいくつか覚えれば、それで同時通訳者になれるという単純な話ではありませんで、こうしたルールや方略を内在化するためには、それ相応の訓練が必要なわけです。だけれども、繰り返しますが、同時通訳は決して説明のつかない神業のようなものではなくて、その背後には、きちんとした原理原則があるんだということは、だいたいおわかりいただけたのではないかと思います。

次のセクションでは、これまでの議論の発展として、いくつか具体的な例を挙げながら、「同通文法」の発見的習得のプロセスについて、うちの学生が授業で実際にやっている事例をいくつかご紹介していきたいと思います。

5．演習問題――「同通文法」の発見的習得

お手元の資料（省略）にありますのは、現在、関大の通訳の授業で使っているオンラインテキストの表紙と目次のウェブページ・イメージですが、この中にある演習7というのが同時通訳文法の導入編を扱ったセクションになります（図6）。これを例にとって、うちの学生が実際にやっていることをご紹介します。

この演習7は「順送りの訳（SG訳）と同通文法」というタイトルになっています。「順送りの訳」というのは、英文をその語順に沿って頭から順に訳出していくという方法で、FIFO（First In, First Out）訳とかSG（Sense Group）訳と呼ぶこともあります。じつはこの演習に入る前に、文字テクストを使った「順送りの訳」についてはすでに練習をしていまして、ここではそこで学んだことを音声テクストについて応用するということになります。

演習の具体的な方法についてはここ（図6）に書いてあるとおりですが、［1］まず、それぞれの課題文を、スラッシュで区切られたSGごとに頭から口頭で訳出します。カギ括弧で示されている語句はとりあえずリテイン（一時的に記憶）しておき、あとから訳出します。¦の個所はそこで切っても切らなくてもかまわないという意味です。［2］次に、画面上のプレーヤーの開始ボタンをクリックして課題文の音声を再生し、まずテクストを見ながら、次にテクストなしで、音声に合わせてSGごとに頭から訳出します。

まあ、実際にやってみないとなかなかわかりにくと思いますので、最初の例文についてやってみます。例文1は次のような英文です。

1．GM and Toyota / are reportedly close to［signing］a joint venture accord /［to produce］more than 200,000 sub-compact cars a year ¦ in the U.S. /

英語通訳訓練法入門

［演習７］ 順送りの訳（ＳＧ訳）と同通文法

●演習の目的
ここでは、演習４の SG リーディングで練習した「頭ごなしの理解」（＝文頭からの理解）の応用として、理解した内容をセンスグループ (SG) ごとに、できるだけ英語の語順に沿って日本語に置き換えていく練習をします。これは、次の演習８以降で行うサイトラ→同時サイトラ→同時通訳という一連の演習の準備作業になります。解説：▸「SG訳」について

●演習の方法
[1] 以下の (1) から (8) の課題文を、それぞれスラッシュで区切られた SG ごとに頭から訳出してください。[ ] で示した語句はとりあえずリテイン（一時的に記憶）しておき、あとから訳出します。¦ の個所はそこで切っても切らなくてもかまいません。なお、意味のわからない語句については、演習４および演習５の読み下し訳例でみたように、英語のまま訳文中にあてはめていきます。
[2] 次に、プレーヤーの開始ボタンをクリックして課題文の音声を再生します。テキストを見ながら、音声に合わせて SG ごとに頭から訳出してください。音声は必要に応じて途中で一時停止しながら練習してかまいません。

1. GM and Toyota / are reportedly close to [signing] a joint venture accord / [to produce] more than 200,000 sub-compact cars a year ¦ in the U.S. /

2. In the meantime, / U.S. embassies in the Middle East / [were reported] to have been placed on full alert / [in expectation of] some kind of terrorist attack. /

3. On the Tokyo Foreign Exchange Market, / the U.S. currency [opened] at ¥105.50 / and followed a steady uptrend to ¥106.40 / before [ending] the morning session. /

4. Imports [fell] by 30.6 percent from 1990, / mainly [owing] to the rapid and substantial appreciation of the yen. /

図６　通訳授業の教材例（演習７の抜粋）

例文には区切りがスラッシュで示してありますので、これに従って、まず“GM and Toyota”と読んだら「GM とトヨタは」と出し、次に“are reportedly close to［signing］a joint venture accord”と読んで「伝えられるところでは、まもなく共同事業協定に調印し」と続け、“［to produce］more than 200,000 sub-compact cars a year ¦ in the U.S.”で「これによって、年間20万台以上の中型車を米国で生産することになります」と訳して全体をまとめる、というわけです。

この練習は、先ほども言いましたとおり同通文法のルールを発見し、これを意識的に適用するための練習ですので、ただ訳すだけではなく、そのように訳せる理由についても学生に考えさせます。例えば、ここで“GM and Toyota”と読んで、あるいは聞いて、すぐに「GM とトヨタは」と訳せるのは、先ほどの［Rule 3］の適用です。で、この［Rule 3］は［Rule 1］と［Rule 2］を前提としています。次の“are reportedly close to［signing］a joint venture accord”のところではまず reportedly が伝聞情報であることを示す定型表現ですので、後続の文脈とは独立して「伝えられるとことでは」と訳し捨てることができます。close to -ing も「まもなく…する」という意味の定型フレーズです。これはいずれも

＞［**Rule 6**］定型句・慣用句はその場で訳し捨てることができる。

というルールにまとめられそうです。sign(-ing) a joint venture accord という動詞句、およびその後の to produce more than 200,000 sub-compact cars... という不定詞句では、前述の［Rule 4］と［Rule 5］がそれぞれ適用されています。なんとなく勘でやってやっているようでも、その背後にはちゃんと説明可能なルールがある、またはルールを立てることができる、ということを、こうやって確認していくわけです。

テクスト上での SG 訳がうまくできたら、今度は音声に合わせてやってみます。まずはテクストを見ながら、次に音声だけでやります。例えばこんな感じです。

＞（音声）
＞ GM and Toyota / are reportedly close to［signing］a joint venture accord /
＞　　GM とトヨタは /　ェ報道によると まもなく　共同事業協定
＞［to produce］more than 200,000 sub-compact cars a year ¦ in the U.S. /
＞に調印し /　　ェこれによって　　20 万台の自動車の生産を米国で行うことになります。/

これでだいぶ同時通訳らしくなりました。先ほどテクスト上だけでやったものと比べて、少し訳が変わっているのに気が付かれたのではないかと思います。例えば、“reportedly”が「報道によると」となったり、“a year”や“more than”に対応する部分が省略されています。“sub-compact cars”も「中型車」ではなくて、「自動車」と言い換えられています。普通のスピードでやると、すべて原文どおりに訳すというわけにもいきません。何かを省略しないと一定の時間内に訳を収めることができないということがしばしばあります。また、“sub-compact cars”などというのも、あらかじめそういう知識がないと、どういうタイプの車かよくわかりませんので、こういう場合はその上位語（上位概念）で置き換えたほうが安全な場合があります。このあたりも、次のようなルールとしてまとめることができます。

＞［**Rule 7**］（情報の省略）何らかの事情で原文情報の一部を省略する必要がある場合、当該命題の必須項ではない付加詞（Adjunct）を当面の省略対象とすることができる。
＞［**Rule 8**］（上位語による置き換え）ある特定の単語（概念）に対応する訳語が見つからない場合は、その上位語（上位概念）で置き換えることができる。

このようにして、課題文を実際に訳しながら、同時に訳出のストラテジーをいろいろと工夫しながら、繰り返し訳出練習をするわけです。

例文２は次のような英文です。

2．In the meantime, / U.S. embassies in the Middle-East /［were reported］ to have been placed on full alert /［in expectation of］some kind of terrorist attack. /

この例では、まず冒頭の“In the meantime”は話の転換をする談話標識として使われていますので、主文の内容にかかわらず、「さて」「所で」のように訳し捨てることができます。これは次のようなルールとして一般化できます。

＞［**Rule 10**］（文頭の副詞句）文頭の副詞句は、主節の内容に関わらずその場で訳し捨てることができる。

主節の“U.S. embassies in the Middle-East”は次の were を聞いた途端に主語（主題部）であることが確定するので、「中東の米国大使館は」と訳すことができます。これは［Rule 3］の適用です。“were reported”は例題 1 で見た reportedly と同じものですので、［Rule 6］を適用して、その場で訳し捨て。“to have been placed on full alert”はちょっと難しいですが、要するに「全面的な（full）警戒状態（alert）に置かれている（have been placed）」ということですね。ここでは文章がまだ続いていますので、「…ている。」と丸を打たずに、「…ており、」という形で次につなげられるようにします。この訳文で、原文のアスペクト（完了相）もほぼ的確に表現されていますし、ボイス（態）も原文どおりになっています。

後半部の“in expectation of some kind of terrorist attack.”は［Rule 5］を適用して全体を命題化します。つまり、以下のような形で原文を概念的に再構成するわけです。

＞This is because they（= U.S. embassies in the Middle-East）expect some kind of terrorist attack.

↓

＞P1：BE（THIS, BECAUSE *P2*）

＞P2：EXPECT（THEY, SOME_KIND_OF_TERRORIST_ATTACK）

こう書くといかにも難しそうですが、実際のオペレーションとしては「これは」という仮主語を入れて、「これは、何らかのテロ攻撃に備えてのことです」と訳せばいいわけです。なお、EXPECT は「期待する」（to think that something will happen or will be true）という意味ですが、日本語の「期待する」というのは、通例、良いことについて言いますので、この場合は文脈的調整を経て「備える」という訳語を選択しています。音声に合わせると、こんな感じになります。

＞（音声）

＞ In the meantime, / U.S. embassies in the Middle-East /［were reported］to have been
＞　　一方 /　　中東の米国大使館は /
＞ placed on full alert /［in expectation of］some kind of terrorist attack. /
＞　　最警戒態勢を敷いて /　　テロ攻撃に備えています。/

これもテクスト上で作った訳とは少し違っています。こちらのほうが、より短く、無駄を省いた洗練された訳になっていると思います。この最終バージョンでは、前述の［Rule 7］が適用されています。

次は例文 3 です。

3．On the Tokyo Foreign Exchange Market, / the U.S. currency［opened］at ¥ 105.50 / and followed a steady uptrend to ¥ 106.40 / before［ending］the morning session. /

まず冒頭の“On the Tokyo Foreign Exchange Market”は［Rule 10］を適当して「東京外為市場では」と訳せます。「東京外国為替市場」とフルで言ってもかまいませんが、普通は「東京外為市場」ですね。“the U.S. currency［opened］at ¥ 105.50”はどう訳したらいいでしょうか。“the U.S. currency”は文字どおりには「米国通貨」ですが、こういう文脈では「米ドル」とするのが普通です。この後の“opened”は「開いた」ではおかしいですよね。「米ドルは 105 円 50 銭で開いた」なんてことは言いません。これは、ここでは「寄り付く」――つまり、取引所でその日の最初の売買が成立することですが、そういう用語を使って訳すべきものですが、学生は日頃、為替とか株取引にかかわる新聞記事などは読んでませんから、こういうのは苦手です。その後の“followed a steady uptrend to ¥ 106.40”（堅調に推移して 106 円 40 銭をつける）や“end”（引ける＝取引を終える）および“morning session”（前場＝午前中の取引）についても同じです。こういうのは、ただ訳すだけではだめで、特定のジャンルのテクストについては、その分野で通常期待される表現・用語を使って訳出しないといけません。まあ、当然と言えば当然のことですが、これも念のためにルール化しておきます。

＞［**Rule 11**］（専門用語）専門用語は、その分野で慣習的に定まっている用語があれば、それを訳語として当てる。日常的な用語が使われている場合には特に注意して調べること。

もちろん、こういうルールは単に「標語」として置いてあっても意味がありませんので、実質化する必要があります。具体的には、学生にさまざまな分野の新聞記事を読ませることから始めます。これは、説明するとちょっと長くなりますが、要するに授業の期間中、*Japan Times* とか *Daily Yomiuri* とかの英字新聞を 1 日 1000 語を目安に、継続して読ませます。1 年で 36 万語になります。だいたい 2 週間を単位にして、経済、金融・証券、政治、科学、文化などの各分野を 1 年間でまんべんなくカバーするようにします。ちなみに、英語は、通訳もそうです

が、最終的にはボキャブラリーです。ある一定以上のボキャブラリーがなければ、これはどうにもなりません。通訳をやるということになると、最低でも１万語の語彙（認識語彙）が欲しいところですが、現在の学生は、優秀な学生でもその半分もありません。とくに、先ほど言いました経済、金融・証券、政治、科学、文化などの分野で使われる専門的な語句を知りません。ということは、そういう語彙が代表する「知識」がないということです。もちろん、こういう各分野のすべてについて専門家なみの知識やボキャブラリーを身に付けろという無謀な要求をしているわけではありませんで、少なくとも新聞やテレビニュースに普通に出てくる程度のことは、大人の常識として身に付けておいて欲しい、ということです。OPEC といわれても何のことだかわからないとか、foot-and-mouth disease を「足と口の病気」と平気で訳しているようでは、これは困るわけです。

話を戻します。先ほどの例題３を音声に合わせて通訳すると、こんな感じになります。

＞（音声）
＞On the Tokyo Foreign Exchange Market, / the U.S. currency［opened］at ¥ 105.50 / and
＞　　東京外為市場では　　米ドルは /
＞ followed a steady uptrend to ¥ 106.40 / before［ending］the morning session. /
＞ 105 円 50 銭で寄り付き /　　その後 堅調に推移して 106 円 40 銭をつけ / 前場を終えています。

この訳は、これまでに出てきたルールですべて説明がつきます。なお、before の処理については冒頭でお話したケーススタディ１で出てきましたが、これについても次のようにルール化しておくことができると思います。

＞［**Rule 12**］（機能的翻訳）命題と命題をつなぐ機能的な役割をもつ語句については、必ずしもその辞書的な意味ではなく、当該の文脈における機能的な意味（functional meaning）を訳出するほうが適切な場合がある。

ただし、この表現だとルールとしては弱い感じがしますので、「Word-based translation（lexical translation）では適切な訳にならない場合は、concept-based translation（conceptual translation）方略を採用する」と言い換えるほうがいいかもしれません。これですと、WBT ＞ CBT という優先順位がはっきりしますので、よりルールらしくなります。

例文４は省略して、例文５を見てみます。このウェブページの画面（図６）をスクロールして下のほうを表示させます。例文５は次のような英文です。

５．AIDS is a disease / in which a virus［attacks］the body's immune system, leaving the victim［susceptible to］a wide variety of infections and cancers. /

この例文では、まず“AIDS is a disease”のところでBE（AIDS, DISEASE）という命題がまとまっていますので、「エイズは病気です」と訳すことができます。これでいいですよね？

いや、よくないですね。「エイズは病気です」って、当たり前のことじゃあないですか。誰でも知ってる当たり前のことは、普通、わざわざ言いませんよね。われわれがある人に対して何かのコトバを発するということは、それが相手にとって聞くに値する情報価値（informative value）があるというメッセージを暗黙のうちに伝えているわけですから、その聞くに値する何かの情報価値がないといけません。「エイズは病気です」という文には、何らの新情報も含まれていませんので、聞くに値する情報価値がありません。こういう訳は、そのあたりのセンスというか、コミュニケーションの基本的な原則に対する理解が欠けていることを示しているわけですが、これは、別の見方をすると、前述の「即時処理」方略の典型的な適用エラーのひとつということもできます。

要するに、“AIDS is a disease”と聞いてすぐに訳出にかかってしまうと、こういうことがしばしば起こります。訳出にかかる前に、最低限、次のユニットの冒頭部を聞いておかないといけません。そうしないと、当該のユニットの意味が正確には確定しないからです。この場合も、次の“in which”まで聞いておけば、この文はエイズについて説明しようとしている文だということが分かります。したがって、「エイズという病気は…」と自信を持って訳出することができます。同時通訳では、あるユニットが確定したらできるだけ早くその部分を訳出するのが好ましいのですが、この例でもわかるとおり、最低限、次のユニットの冒頭部を聞いてからという制約をかけておいたほうがよさそうです。これを仮に［Rule 13］としておきます。

＞［**Rule 13**］（即時処理方略の制約）同時通訳は即時処理をデフォルトの方略とするが、この場合、最低限、次のユニットの冒頭部を聞いてから（当該ユニットの訳出プランが正しいことを確認してから）訳出にかかるのが好ましい。

このルールを念頭に入れて、例文5を音声に合わせて訳してみます。

＞（音声）
＞AIDS is a disease / in which a virus［attacks］the body’s immune system, leaving the victim
＞　　エイズという病気は /　　ウイルスが 免疫システムを攻撃し
＞［susceptible to］a wide variety of infections and cancers. /
＞　患者を　　さまざまな感染症や癌にかかりやすくします。/

これで、全体として情報価値のある発話になりました。ちなみに、原文は、概念レベルで次のような3つの命題要素に還元されています（一部簡略化）。

P1：BE（AIDS, *P1 & P2*）

P2：ATTACK（VIRUS^{i}, IMMUNE_SYSTEM）

P3：LEAVE_SUSCEPTIBLE（ϕ^{i}, VICTIM, TO_INFECTIONS_AND_CANCERS）

これを命題表示レベルでそのまま日本語化すると、ほぼ次のようになります。

P1：である（エイズという病気^{は}, *P2* & *P3* ）

P2：攻撃する（ウイルス^{i}^{が}, 免疫システム^{を}）

P3：かかりやすくする（ϕ^{i}^{が}, 患者^{を}, 感染症や癌^{に}）

あとは、これを日本語のシンタクスに従ってオンラインで再構成しながら発話する、ということになります。

なお、infection（感染症）とかcancer（癌）くらいならそう大して難しい単語ではありませんが、実際には聞いたことのないような病名が出てくることもしばしばあります。通訳者もすべて100パーセント分かって通訳しているわけではありませんで、知らない単語はしょっちゅう出てきます。したがって、そういう場合にどう対処するかという方略をもっていないといけません。例えば、これが“a wide variety of infections and *curoteouspancreamos*”のようなフレーズだったらどうするか。この“*curoteouspancreamos*”というのはいま適当に作ったもので、こんな単語は実際にはないわけですが、仮に本物の単語だったとして、こういう場合にどうするか。この場合、文脈から「病気」のことを言っていることが分かりますので、具体的な病気の名前が分からなくても、最低限「さまざまな感染症などの病気に」とか「さまざまな病気に」という訳を作ることはできます。前者は「代表化」、後者は「上位語による置き換え」という方略です。「代表化」というのは、いくつか例示されているものの中からひとつを選び、それで他を代表させるという方略です。通例、「…など」というフレームを使って実現します。後者についてはすでに触れました。

一般に、学習者は分からないほうにフォーカスしてしまいますので、分からない語句が出てきたらそこでクラッシュしてしまう。プロは、分かるものを中心に全体を要約的に処理することができる。このあたりがプロと素人の大きな違いのひとつなんですが、練習のときにはそういう力、創造的な運用力ですね、これを付けるために、意図的に「代表化」や「置き換え」といった方略を使って――あるいは使わざるを得ないような状況を作って――さまざまな訳を工夫するようにさせています。

訳語の決定プロセス――解釈的類似性と「ミッシングリンク」

それから、ついでに少し触れておきたいと思いますが、例えばこの例文に出てくるvictimは「犠牲者、被害者、被災者、罹病者、患者」などさまざまな訳語が可能です。基本語義は「何かの被害を被った人」(someone who is badly affected by some event and suffers as a result of it)ということで、これが文脈に応じて犠牲者（＝おそらく死亡している場合）や被災者（＝自然

災害などの被害を被った場合)、あるいは患者（＝病気の場合）などとなるわけですね。こういう訳語の選択プロセスというのも研究対象として大変面白いんですが、起点言語の A という単語が目標言語の B という単語に翻訳されるのは、何らかの意味的＝概念的側面における解釈的類似性（interpretive resemblance）によるとわれわれは考えます。A が B に翻訳可能なのは、両者が何らかの側面で意味的に類似しているから、というわけです。まあ、言ってみれば当たりまえのことですが、図に書くと次のようなことになります（図 7）。

この図は、SL（Source Language）の単語 A が持ついくつかの主要な概念特性＝基本語義のうちのひとつが、TL（Target Language）の単語 B の基本語義のひとつ（および拡張語義のうちのひとつ）と一致しており、その限りにおいて AB 間の類似性が高い、ということを示しています。両者の類似性は、共有する概念特性が多ければ多いほど強く、また基本語義（Primary Meaning）レベルでの類似性が多ければ多いほど強い、ということになります。この Primary Meaning（基本語義）というのは非文脈依存的な語義で、Extended Meaning（拡張的語義）というのは文脈依存的な語義ですね。ある単語の比喩的な意味というのはすべて拡張的語義ということになります。

もっとも、これまでも見てきたとおり、ある単語の意味というのは、その単語だけを取り出して議論してもあまり意味がありませんで、いつも「特定の文脈における意味」というレベルで考える必要があります。「文脈」にもさまざまなレベルがありますが、基本的な出発点はその単語を含む当該のセンテンスです。われわれの場合は、その基底構造としての「命題」を出発点とします。わかりやすい例として、冒頭で挙げた「地震文」を例にとってみます。この例文では、

＞ HIT（STRONG_EARTHQUAKE, WIDE_AREA_OF_JAPAN）

という命題があって、これを

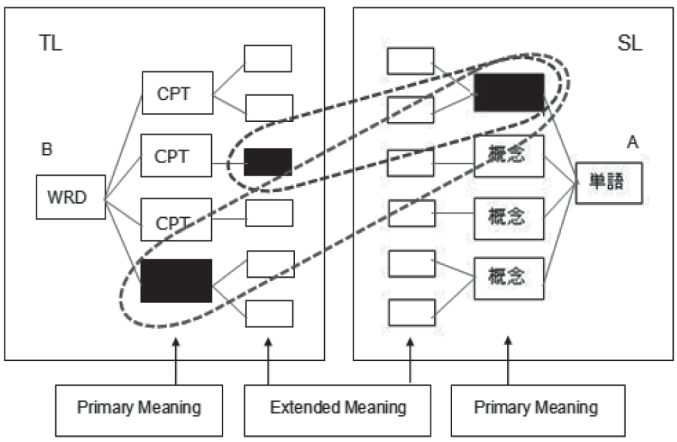

図 7　SL と TL 間の語彙的類似性（概念図）

＞観測された（地震が , 日本の広い地域で）

と訳したわけですが。HIT がどうして「観測する」という訳になったのかについては、詳しい説明はしませんでした。普通に考えれば、“HIT”と「観測する」の間には何かの「ミッシングリンク」があるような感じがしませんか。この「ミッシングリンク」は語彙レベルの分析ではなかなか出てきません。ごく簡単に説明しますと、このミッシングリンクは、次のような命題レベルでの「橋渡し推論」（bridging inference）のプロセスとして説明することができます。

1．**HIT**（EARTHQUAKE, PLACE）

↓ as one of possible resultive events of this proposition（i.e. If an earthquake strikes, it must be felf by somene.）

2．BE_**FELT**（EARTHQUAKE, AT_PLACE, BY_SOMEONE）

↓ as a formal lexical equivalent of FELT（which is more appropriate in the given communicative context）

3．BE_**OBSERVED**（EARTHQUAKE, AT_PLACE, BY_SOMEONE）

これも授業用のデータですので英語で書いてありますが、これを日本語で説明すると次のようになります。

1．地震が（場所を）HIT する

↓ この命題が表現する事態が、通常想定させる結果のひとつとして（i.e. 地震があれば、誰かがそれを感じるはず）

2．地震を（どこかで , 誰かが）感じる

↓「感じる」のフォーマルな言い換えとして（当該の文脈が要求するレジスターレベルに合わせて（かつ「地震」を主題として））

3．地震が（どこかで , 誰かに）観測される

さて、あまり時間もありませんので、最後にもうひとつだけ、今度はやや長めの文を使ってやってみます。例文 8 です。

8．A Korean Air jet / with 115 people aboard / on a flight from the Middle East / ［was missing］somewhere near Burma, / and may［have crashed］into the sea or thick jungle. / Officials said / the missing plane was over the Andaman Sea / when contact was lost. / Experts say / that recovery of the flight recorder, / which could explain the disaster, / will probably be difficult / because the aircraft crashed in waters ¦ 3,600 meters deep.

これぐらいの長さになると、オンラインで同時通訳するのはけっこう難しいんですが、順序

を踏んでやれば学生の大半ができるようになります。これができれば、たいていのものはできるんじゃないでしょうか。あとはボキャブラリーと背景知識の問題です。これは、スキルでは解決しませんので、時間をかけて取り組むべき課題です。

試しに、最初から音声に合わせて訳してみます。

＞（音声）
＞A Korean Air jet / with 115 people aboard / on a flight from the Middle East / ［was missing］
＞　　大韓航空機が / 115人を乗せ /　　中東からの帰路
＞somewhere near Burma, / and may ［have crashed］ into the sea or thick jungle. / Officials said /
＞　　ビルマ付近で行方不明となっており / おそらく海中かジャングルに墜落
＞ the missing plane was over the Andaman Sea / when contact was lost. / Experts say / that
＞したものと思われます / 関係者によると /　　この飛行機はアンダマン海上で消息を絶った
＞recovery of the flight recorder, / which could explain the disaster, / will probably be difficult /
＞もので / 専門家の話では　　フライトレコーダーの回収… / ができれば事故の原因もはっき
＞ because the aircraft crashed in waters ¦ 3,600 meters deep.
＞りすると思われますが / これは困難だと思われます / この海域は水深3000メートルにもおよぶところだからです。

いくつか省略したり、まとめたりしたところがあります。最後は時間的にやや詰まりましたので、かなり早口になりました。まあ、こういうのは、やるたびに少しづつ違ってくるんですが、練習で一番重要なのは途中でクラッシュしないことです。クラッシュというのは、途中で訳がストップして立ち往生してしまう状態を言います。クラッシュせずに、とにかく最後のピリオドのところまでなんとか完成させること、これが大事です。

少し細かく見てみます。まず、冒頭のA Korean Air jet / with 115 people aboard / on a flight from the Middle East / のところですが、これは

P1：WAS_CARRYING（KOREAN_AIR_JET^{i}, 115_PEOPLE）
P2：WAS_FLYING（ϕ^{i}, FROM_MIDDLE_EAST（BACK TO KOREA））

のように2つの命題として処理することができます（Rule 2）。WAS_CARRYING やWAS_ FLYINGは、本来はそれぞれCARRY$^{+\text{PASSIVE},+\text{ING}}$およびFLY$^{+\text{PASSIVE},+\text{ING}}$のように表記するのがいいのですが、これはどちらでもとくに問題ありません。P2の末尾に（BACK TO KOREA）というのが付け加えられていますが、こういう操作を「富化」（enrichment）とか「明示化」（explicitation）と呼びます。原文の中に論理的あるいは慣習的に含意されている意味を、明示的に表現するという操作です。この場合、大韓航空機が中東から飛行してきているということは、韓国への「帰路」であることは論理的な帰結です。同じように、115_PEOPLEも「115名の乗員・

乗客」という形で富化することができます。もっとも、必要がなければわざわざ富化や明示化をするには及びません。KOREAN_AIR_JET は「大韓航空のジェット機」ということですが、ここでは「大韓航空機」と訳しています。いまどきプロペラ機のはずもありませんので、「ジェット機」とわざわざ言わなくても、「ジェット機」であることは当然の前提だからです。この操作は、さきほどの「明示化」の反対の操作ですね。こういうこともルールとして立てることができますが、ここでは省略しておきます。

次の（A Korean Air jet）was missing somewhere near Burma / のところでは、この文の 3 つ目の命題がまとまっています。つまり

P3：WAS_MISSING（ϕ^i, SOMEWHERE_NEAR_BURMA）

ということですが、ここでは主語＝主題はすでに「大韓航空機が」と出していますので、これを受けて「…ビルマ付近で行方不明になっています」とします。なお、「ビルマ」というのは現在は一般に「ミャンマー」と呼びますが、ご存じのとおり、米国や英国では軍事政権を認めない立場から、以前からの呼称である「ビルマ」という国名を使っています。このような政治的な背景のあるものについては、安易な言い換えはしないのが鉄則です。

次の and may have crashed into the sea or thick jungle. の部分は、基本命題としては「海またはジャングルに墜落した」ということですが、これに MAY という推量の法助動詞が付いて、さらに述語のアスペクトとして現在完了形が指定されています。こういう情報を含む命題を「高次命題」と呼びます。具体的には次のようになります。

P4：MAY（CRASH $^{+\ \text{PRESENT_PERFECT}}$（$\phi^i$, INTO_SEA_OR_JUNGLE））

これを正確に訳出するとすれば、先ほども見ましたとおり、「おそらく 海またはジャングルに墜落したもの と思われます」ということになるかと思います。下線部が推量、波線部が完了相という高次情報にそれぞれ対応します。きょうの話の「同通文法」の導入部で、例文として取り上げた「宿題文」にも MUST という法助動詞がついていました。あの例でもそうですが、こういう高次情報を正確に訳出するというのも、場合によっては非常に重要になります。このあたりも「ルール」候補ですね。ちなみに、例文 8 ではこのあとに“which *could* explain the disaster”という文章が出てきますが、これも EXPLAIN（WHICH, DISASTER）という基本命題に COULD という高次の意味が加わった例です。訳例では「…ができれば、～と思われます（が）」という形で、これに対応しています。

もっとも、訓練としては、まずは基本情報（低次命題）をきちんと押えることにポイントを置いて、徐々に高次情報も適切に表現していくように指導していくわけですが、この例文では、そういった高次情報の重要性にも目を向けさせる、ということをひとつの指導ポイントとしています。

この例文でのもうひとつの指導ポイントは、先ほどの which（関係代名詞）や、その少し前に出てくる when（関係副詞）の扱いです。この場合の which はいわゆる制限用法というやつ

で、先行文節との句切れがはっきりしていますので、訳出上はとくに大きな問題はありません。ただし、the missing plane was over the Andaman Sea *when* contact was lost. という部分については、これを「この飛行機は、消息を絶った時、アンダマン海上にあった（＝を飛行していた）」のように、「…した時、〜だった」という形でひっくり返して訳していたのでは、同時通訳としては都合が悪いわけです。ということで、同時通訳では、原則として関係詞節は独立した命題として扱い（Rule 2）、先行の文節とは切り離して処理をします。その上で、先行の命題との適切な合成化を経た上で訳出することになります。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、要するに以下のような処理をすることになります。

＞ the missing plane was over the Andaman Sea when contact was lost.
　↓　命題化処理
＞ P1：WAS（MISSING_PLANE^{i}, OVER_ANDAMAN_SEA）
＞ WHEN
＞ P2：LOST（ϕ^{i}, CONTACT）
　↓　命題の合成
＞ the missing plane^{i} was over the Andaman Sea
＞ and at that time
＞（it^{i}）lost contact.
　↓　訳出
＞この飛行機は、アンダマン海上（にあったその時 →）で、消息を絶った

みなさんよくご存じのとおり、英語では関係代名詞や関係副詞を使った文章というのはたくさん出てきますし、日本語との統語上の違いがもっともよく現れるところです。それだけに大事なところですので、とりあえず次のようにルール化しておきます。途中、ルール化すべきところをいくつか省略してきましたので、番号はついてはこの場限りの適当なものということでご了承ください。

＞［**Rule 14**］（関係詞節の訳出）関係代名詞節や関係副詞節は、原則として独立した命題として扱い（Rule 2）、先行の文節とは切り離して処理をする（その上で、先行の命題との適切な合成化を経た上で訳出する）。

最後に、もう 1 点だけコメントしておきます。先ほどの同時通訳例で、最後の部分が「この海域は水深 3000 メートル以上におよぶ」という訳になっていましたが、これ、明らかに原文と違いますよね。原文では“3,600 meters deep”と言ってます。実はこれ、先ほどメモを取ら

ずに記憶だけでやったことと、最後は時間的にやや詰まってきましたので――認知的負荷が高い状態になっていた、ということですが――そのため、“3,600”という情報が短期記憶の中で少し変化して“3000”ということになったのだと思われます。認知的負荷がもっと高い状態になると、数字そのものが飛んでしまうことがあります。

このことから言えることは、ひとつには同時通訳においても「メモ」を取りながら作業をしたほうがよいということ、もうひとつは、仮に具体的な数字を正確に取れなかった場合、または忘れてしまった場合、適当な数字を入れるよりは、⑴大きな桁に丸める（例：3600 meters →「およそ 3000 メートル」「3000 メートルにも及ぶ」）、あるいは⑵その数字が示す「多い、少ない、深い、高い」などの概念の程度として表現する（例：3600 meters *deep* →「相当な深さの（に達する）」）といった対応策を、「方略」として身につけておく必要があるだろう、ということだと思います。

6．まとめ

そろそろ時間がきましたので、このあたりで今日の話をまとめたいと思います（注）。いまご紹介した練習問題は、現在、関西大学外国語学部で使っている「英語通訳訓練法入門」（Introduction to Interpreter Training）というオンラインテキストからの抜粋（図 6 参照）ですが、このテキストは、この後に

演習 8　サイト・トランスレーション（→英文を黙読しながらオンラインで口頭翻訳する訓練）
演習 9　区切り聞き（→音声テクストを適当なユニットごとに区切りながら訳出していく訓練）
演習 10　同時サイトラ（→文字テクストを見ながら音声に合わせて訳出していく訓練）
演習 11　同時通訳 1（→文字テクストなしの同時通訳）
演習 12　同時通訳 2（→同上）

と続きます。なお、演習 13 から演習 21 までは逐次通訳編で、通常、これは後期に扱います。教材は、基本的にはタスクの複雑さ（task complexity）――あるいは難易度といっても同じことですが――これを少しづつ増していくように構成されていますが、本日ご紹介した同時通訳編では、演習 7 から演習 12 までのすべての課題を通じて、前述の「同時通訳文法の発見的習得」ということを、ひとつの大きなテーマとして取り組ませています。

同時通訳というのは特殊な能力をもった人にしかできない「名人芸」とか「神業」とかいうものではなく、一定の原理原則に基づいた説明可能な作業であり、その原理原則をスキルとして習得することで、通常の言語能力を備えた人であれば誰にでも――ただし、一定の訓練を経てという条件つきですが――できてしかるべき作業である、というのが本日の講義の前提であり、結論ですが、90 分という時間内でどの程度ご納得いただけたか、そのあたりはよくわかりません。もし、ご関心のある方がおられましたら、毎週金曜日の夜に行っている大学院（外国

語教育学研究科）の授業で聴講生を受け入れていますので、そちらにぜひご参加いただければと思います。1 科目たしか 2 万 8 千円ほどの授業料で聴講していただくことができますので、民間の通訳学校と比べると 10 分の 1 程度のたいへんお得な料金で受講することができます。ということで、本日の講義はこれで終了させていただきたいと思います。長時間のご清聴、ありがとうございました。

注）講演では、最後に「通訳訓練法を応用した効果的な英語学習法」というタイトルで 15 分ほどの話をしていますが、その内容は染谷（2011）に書いた内容とほぼ同じであることから、本稿では省略しました。

引用文献

Ericsson, K.A., Krampe, R. and Tesch-Romer, C.（1993）. “The Role of Deliberate Practice in the Acquisition of Expert Performance.” *Psychological Review,* 1993, Vol. 100. No. 3, 363-406. The American Psychological Association.

染谷泰正・斎藤美和子他（2005）「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号（pp. 285-310）　日本通訳学会（現・日本通訳翻訳学会）

染谷泰正（2011）「プロダクション訓練の方法論とその理論～インプットからアウトプットへの橋渡し」関西大学外国語学部紀要第 5 号（pp. 93-132）

松縄順子（2007）「ニュールンベルグ裁判裁判と同時通訳」大阪：エンタイトル出版

渡部昇一他（1991）「外国語教育の一環としての通訳養成のための教育内容方法の開発に関する総合的研究」1988-90 年度科研費研究報告書 http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/01102017

渡部富江（1998）「東京裁判の通訳研究 —— 東条英機証言を通じて」大東文化大学経済研究科提出未刊行修士論文